

道民の森神居尻地区における森林学習プログラム作成の取り組み

学校教育対象のプログラム実施と児童生徒・教師の評価

北海道立林業試験場 佐藤 孝弘

道民の森建設事務所 塚田 晴朗

1 はじめに

2002年度から学校教育において始められる「総合的な学習の時間」では、教科横断的な体験学習の展開が求められる。多様な側面を持ち、人間の生活基盤でもある森林は、このような学習の場にふさわしく、今後、森林利用施設を活用した学習が注目を集めることは明らかであり、施設整備と併せてソフト提供に向けた取り組みが必要である。

北海道立林業試験場では、道民の森建設事務所、道民の森管理事務所と共に、平成11年度より森林学習センターを拠点としたプログラムの開発を進めているところであるが、ここでは、平成12年度に試験提供を行った、学校との野外活動実践の状況について、教材研究、児童生徒・教師からの評価を交えて報告し、活動提供に必要な体制やプログラムの改善点について報告する。

2 森林学習の提供手順と実施状況

平成12年度は試験提供の形式を採り、道民の森神居尻地区に宿泊研修で訪れる学校に、学習プログラムの提供が可能であることを伝え、希望のあった学校の実施時期や要望、人数等に合わせて企画・準備をし、プログラムの提供を進めた。なお、今年度は森林学習プログラムに加え、昨年度、現場が取り組んだ「森の体験工房」での創作活動プログラムと道民の森ボランティアレンジャーによる自然観察も

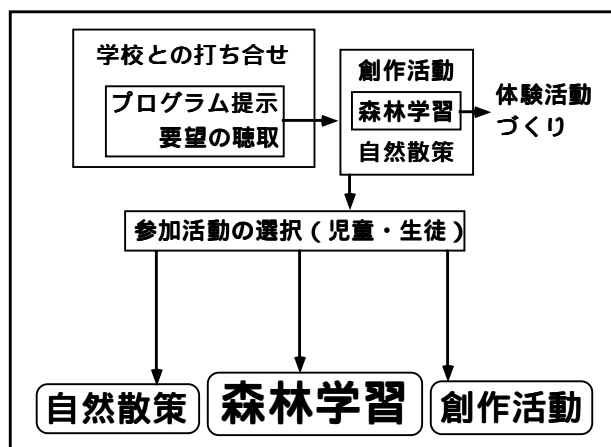


図 1 森林学習プログラム提供の手順

並行実施し、児童生徒はこれらから一つを選択する形式をとった(図 1)。プログラムの希望は7件であったが、雨天中止により、5校に6種類の森林学習プログラムを実施した(表 1)。

表 1 森林学習プログラムの提供状況

実施日	学校名	来園者 (人)	参加者 (人)	プログラム名
6月1日	札幌市立西岡中学校	112	100	山菜・毒草を知ろう
6月20日	旭川市立末広北小学校	108	26	たずね人探し
○6月28日	滝川市立第三小学校	83	31	たずね人探し
7月6日	北広島市立大曲東小学校	129	7	森の木を覚えよう
7月11日	当別町立西当別小学校	114	18	森にすむ昆虫(初夏)
○7月17日	夕張市立清水沢中学校	48	17	色々な方法で虫をとろう
9月6日	札幌市立新稜東小学校	96	26	原始火起こしでたき火をしよう
			11	森にすむ昆虫(晩夏)
			12	川の水を調べよう

- ・ 印は雨天中止
- ・ 来園者は引率者込みの人数である
- ・ 来園者数と参加者数の差が多い学校は、他の活動を同時実施(例:自然観察、創作活動、サイクリング、木工、陶芸等)

次に、実施プログラムの一部を写真 1～3 に示す。写真 1「たずねびとさがし」は、カードと探索マップを持って森林を歩き、カードにある「たずねびと」(森林の動植物や様々な事象)を探す活動を通じ、森林を見る糸口の多様さ、森林の生き物の動き、生き物同士のつながりに気づかせる探索型のプログラムである。カードは季節に応じ、神居尻地区内の散策路沿いに見られるものを取り上げ、探索マップにはそれぞれの事物がどの辺りで見られるかが記載されている。季節別・場所別にカードを増やしていけば、要望に応じたコースの設定が自由に行えるようになる。

写真 2「森の木を覚えよう」は、ゲームや図鑑づくり等の活動を通じて、森の木を覚えるプログラムで、ふだん全て同じに見える樹木を、葉や幹の手触り等から見分ける観察力を養い、樹木の多様さを実感させるプログラムである。図鑑づくりの方法に工夫を凝らし、ゲームの内容を変えることにより、季節性や地域性に合った内容づくりが可能になる汎用性の高いプログラムである。

写真 3は「森の昆虫(初夏版)」である。プログラムに生き物遊びを採り入れ、生物の多様性や生き物の命の大切さを実感させるプログラムである。観察・採集の対象とする昆虫を変えることにより、異なる季節でも実施が可能で、初夏版は蝶やクワガタムシ等を用いたのに対し、トンボ類を主要に取り扱った「森の昆虫(晩夏版)」も今年度実施している(雨天のため一部内容を縮小)。



写真 1 たずねびと探し



写真 2 森の木を覚えよう



写真 3 森の昆虫(初夏版)

3 森林学習プログラムに関する調査の進め方

森林学習プログラムに係る課題や改善点を考察するために、以下の点について調査を実施した。

1) プログラム提供のための教材研究に要した作業量と作業内容

実施したプログラムの企画立案や教材準備の内容やこれに要した人数・時間を集計して、プログラム提供に要した教材研究のための作業量と作業内容を把握した。また、これらの点から、次年度以降のプログラム実施に求められる実施体制について考察した。

2) 児童生徒・教師からの評価

次年度に向けての改善点や問題点を考察するために、森林学習プログラムに参加した学校の児童生徒とこれを参観した教師に評価を依頼した（評価数：児童生徒 178、教師（小学校の教師のみ）6）。内容は、児童生徒へは学習プログラムへの5段階評価と評価の理由（自由記載）であり、教師へは、プログラムの指導上重要となる8項目に関する5段階評価と自由記載による意見・希望であった。

また、これに加えて、訪れた全児童生徒・教師を対象にアンケート調査を実施して情報収集を行った。内容は、児童生徒に対して学校周辺の自然の豊かさとその自然へ出かける機会の多さとふだん行っている遊びの種類をたずね、教師には、森林学習プログラムに関する情報提供に適した時期と「総合的な学習の時間」の取り組み予定をたずねた（回答数：児童生徒 511、教師 16 表 2）。

表 2 評価の内容と進め方

実施対象校	対象者と回答数	評価の内容
札幌市立西岡中学校	森林学習に参加した 児童生徒・教師	児童生徒 プログラムへの評価（5段階） 評価の理由（自由記載）
旭川市立末広北小学校	児童生徒 178 教師 6	教師 指導の進め方の評価（8項目5段階） 指導への意見・希望（自由記載）
北広島市立大曲東小学校	全校児童生徒・教師	児童 学校周辺の自然の豊かさ 学校周辺の自然へ出かける機会 ふだんしている遊び
当別町立西当別小学校		
札幌市立新稜東小学校	児童生徒 511 教師 16	教師 森林学習プログラムの情報提供の適期 総合的な学習の時間への取り組み予定

4 教材研究とその他の準備に要した作業量と作業の内容

依頼のあった7校のために企画した9種類の活動準備に72日/人（1日＝8時間）を要した。また、1活動あたりの準備作業量は延べ3～16日/人で、教材研究に関する作業が平均70%（60～90%）を占めた（表 3）。さらに、今年の取り組みのために実施した教材研究の内容をみると、作業項目には、技術や知識の習得（山菜採り、火おこし、昆虫の標本づくり等）、散策路の基本図作成（たずねびと探し）等、次回の実施時には省略し得る項目も見出された（表 4）。

表 3 プログラム準備に要した作業量と教材研究の占める割合

プログラム	参加人数（人）	作業量（日×人）1日＝8時間			作業の割合（割）		雨天中止
		合計	教材研究	その他	教材研究	その他	
山菜・毒草を知ろう	100	16.1	10	6.1	6	4	教材研究：フィールド確認 自然教材の調査・抽出 ・吟味・採集 等
森にすむ昆虫（初夏版）	18	12.8	9.5	3.3	7	3	
たずねびと探し	26	10.8	7	3.8	6	4	
森にすむ昆虫（晩夏版）	11	7.7	7	0.7	9	1	その他：事務打ち合せ、配布資料作成、指導案づくり等
原始火起こしてたき火	26	7.2	6	1.2	8	2	
○たずねびと探し	31	6.8	4	2.8	6	4	
○色々な方法で虫をとろう	17	4.0	3.5	0.5	9	1	
森の木を覚えよう	7	3.7	3	0.7	8	2	
○川の水を調べよう	12	3.2	2	1.2	6	4	
総計（日・人）		72.3		平均	7	3	

表 4 各プログラムの主な準備作業

たずね人さがし	山菜・毒草を知ろう	森にすむ昆虫（初夏版）
学校との打ち合せ 実施内容検討 候補ルート選定 観察素材の探索 観察素材の教材的位置づけの検討 冠隼素材および観察箇所の選定 ツタウルシ・危険箇所等チェック ○園路形状の精査とマップ化 観察素材の位置落とし 探索マップの作成 たずね人カードの作成 活動方針の検討・必要小物類の考案と作成 指導案づくり・文書化 直前現地打ち合せ 雨天時の対応検討	学校との直接打ち合せ 実施内容検討 実施林分の選定 山菜の生育状況・分布箇所・分布量の精査 毒草の分布実態調査 ツタウルシ・危険箇所等チェック ルート・活動場所設計（例示・試食・採取・毒草観察箇所） 3クラスの移動・活動順序、プログラム展開時間の設計 ●山菜採り方講習（講師用） ●毒草見分け方講習（講師用） ○資料写真の撮影・収集 ○資料作成（山菜の特徴・正しい採り方・毒草） ルート沿いの他の観察対象チェック（花ほか） 指導案づくり・文書化 直前現地打ち合せ・リハーサル 採り方訓練を兼ねた試食用・収穫補填用山菜採取 試食用調理材料の調達・調理 現地試食体験会準備 雨天時の対応検討	学校との直接打ち合せ 実施内容検討・打ち合せ 実施候補地の選定・踏査・経路決定 ツタウルシおよび危険箇所チェック 地表性昆虫用コップトラップの設置場所選定・試験設置と環境別捕獲種調べ スウィーピング実施箇所選定・試験実施と捕獲種チェック 蜜トラップの試験設置 パナトラップの設置法考案・試験設置と成績調査 必要小道具類の準備（毒びん・毒液・まち針・三角紙・捕虫網ほか） ●チョウの捕殺法・三角紙の使い方・展翅手順の講習（講師用） 指導案づくり・文書化 配付用展翅板の作成 雨天時主教材用・晴天時予備教材用昆虫の事前採集と保存 直前打ち合せ・リハーサル 雨天時対応検討
森の木を覚えよう	原始式火起こしでたき火をしよう	森にすむ昆虫（晩夏版）
学校との打ち合せ 実施内容検討 実施候補地の精査・経路決定 ツタウルシ・危険箇所等チェック 図鑑づくり体験用の用紙・樹名表示板等作成 指導案づくり・文書化 樹名表示板の設置 木の葉カルタ用の葉の採取 直前現地打ち合せ・リハーサル 雨天時対応検討	学校との直接打ち合せ 実施内容検討 ●舞いざり式火起こし器による火起こし試験 ●火切り板の改良試験 ●火切り板の作成（トドマツ製） ●火切り棒の材質検討（アジサイ・ヤマグワ材の調達と試験） ●舞ざり式火起こし器による火起こし練習（講師用） ●着火剤の調達・準備（も草・おが屑・ほくしシュロ縄） 自然素材の着火剤としての適性試験 薪割り体験用各種丸太の調達と切断 薪割り体験用の鉋・斧・まさかり・薪割り台の準備 体験実施場所および自然素材収集コースの検討・決定 ○例示用各種火起こし器の作成（もみきり式・弓きり式） ○火起こし方法の資料作成 指導案づくり・文書化 雨天時実施法の検討 雨天時対策・火起こし素材類・関連植物サンプルの事前収集 雨天時対策・たき火焚き用素材類の事前収集 火起こし器の調整 事前打ち合わせ・現地最終確認 会場設営（雨対策用コンパネ敷設）、用具・丸太搬入	学校との直接打ち合せ 実施内容検討 実施候補地の選定・踏査・経路決定 コース付近の昆虫相の把握 昆虫捕獲法検討と捕獲試験 配付用展翅板・展翅板の作成 必要小道具類の準備（毒びん・毒液・まち針・三角紙・捕虫網ほか） 指導案づくり・文書化 雨天時主教材用・晴天時予備教材用昆虫の事前採集と保存 現地確認
川の水を調べよう（雨天中止）	いろいろな方法で虫をとろう（雨天中止）	
学校との直接打ち合せ 実施内容検討 実施場所の検討・選定 水生昆虫観察用の用具・図鑑類の準備 水質検査用の用具・試験準備 水質検査用の教材作成 水の濁り体験用教材集め（泥・砂・木屑など） 水生昆虫捕獲調査（種類・生息条件） 水質検査の試行（酸性度・硬度） 指導案づくり 現地確認	学校との直接打ち合せ 実施内容検討 実施候補区域決定 捕獲用道具類の準備（捕虫網・たたき棒・傘 ほか） ルッキング実施箇所選定・カブトムシ・クワガタ類の集まる木の探索 スウィーピング実施箇所検討 ビーチング実施箇所検討 ●トラップ類の検討と各種トラップ（ペットボトル、牛乳パック等）の試作 ●トラップ類（地表性昆虫・樹上昆虫ほか）設置箇所選定・試験設置 製作体験（トラップ・吸虫器）用の材料・工具の準備 ●トラップ設置体験箇所の検討、スコップほか準備 活動ルート決定・トラップ設置・ツタウルシおよび危険箇所チェック 指導案づくり 直前現地確認 雨天時対応検討	

●：技術・知識習得の性格が強い項目
 ○：以後利用可能な基本資料やサンプルの作成・収集等

5 児童生徒・教師からの評価

表 5 に児童生徒からの5段階評価の結果を示す。5段階で提示した評価項目のうち、「とても良かった」「良かった」を肯定的評価（体験活動が楽しかったとする評価）、「ふつう」「おもしろくなかった」「全然おもしろくなかった」を否定的評価（体験活動の問題点を指摘した評価）として、その比率を求めた。

表 5 児童生徒の評価（5段階）

実施プログラム名	総数	回答数					回答割合（%）		
		5段階評価					肯定的	否定的	
		肯定的		否定的					
		5	4	3	2	1	肯定的	否定的	
山菜・毒草を知ろう	96	27	39	22	7	1	69	31	
たずねびと探し	29	22	5	2	0	0	93	7	
森の木を覚えよう	7	6	1	0	0	0	100	0	
森にすむ昆虫（初夏版）	18	7	7	1	3	0	78	22	
原始式火起こしでたき火をしよう	23	11	11	1	0	0	96	4	
森にすむ昆虫（晩夏版）	5	5	0	0	0	0	100	0	
							平均	89	11

5：とても良かった 4：良かった 3：ふつう 2：おもしろくなかった 1：全然おもしろくなかった

これによると、肯定的評価の比率が最も高かったのは「森の木を覚えよう」「森の昆虫（初夏版）」の100.0%であり、最も低いのは「山菜・毒草を知ろう」の69.0%であり、総じて、参加した児童生徒の平均89.0%（69～100%）が、プログラムに肯定的評価を与えていた。さらに、これら評価の理由についてたずねた結果を表 6 に示す。

表 6 肯定的・否定的評価の理由（児童生徒）

プログラム名	肯定的評価の理由・頻度	否定的評価の理由・頻度
山菜・毒草を知ろう	自然・森林について学べた 17	暑さ・疲労・水分 12
	山菜を採って楽しかった 16	山登り・虫が嫌い 9
	日頃できないことができた 11	
たずね人さがし	色々な木・草花がわかった 20	学校の勉強と同じ 2
	学校では体験できないから 4	
森の木を覚えよう	ゲーム・スケッチが楽しい 3	
	色々な木がわかった 2	
森にすむ昆虫（初夏版）	色々な昆虫を採集した 11	虫が嫌い・苦手 2
	標本づくりが楽しい 3	
原始式火おこし	火がついたから 8	火がつかなかった 1
	火はつかなかったけれど 良い体験ができた 4	
	普段できないことができた 4	
森にすむ昆虫（晩夏版）	森のことがよくわかった 2	
	札幌では体験できない 2	

評価の理由のうち肯定的評価では、「山菜を採って楽しかった」「標本づくりが楽しい」「火がついた」等、体験学習の楽しさやプログラムの目的が達成できた点や、「色々な木がわかった」「色々な昆虫に触れて採集できた」等の多様な森林の素材に触れることができた点、さらに、「日頃できないことができた」「学校では体験できない」「札幌市では体験できない」といった、体験内容の非日常性が好評価の理由として多い結果であった。それに対して否定的評価では「暑さ・疲労・水分補給」「学校の勉強と変わらない」「火がつかなかった」が挙げられ、プログラム実施の際の配慮不足、プログラムと学校の授業の類似性、目的の未達成、児童生徒の嗜好に関する事柄が理由として指摘されていた。

次に、教師からの評価結果をみることにする。表 7 はプログラムの指導上重要となる 8 項目に関する 5 段階評価を平均値で表したものである。各項目の値をみると、最高は「教材準備」の 4.83、最低は「指導目的の達成」の 3.83 であり、各項目ともに概ね 4.00（良好であった）前後の評価が得られた。8 項目はそれぞれ「活動までの準備に関する事柄」「活動中の児童生徒への接し方」「活動中の配慮・活動の成果」に分類できるが、前二者に比較し「活動中の配慮・活動の成果」の評価が相対的に低い結果と

表 7 教師による指導の進め方への評価

評価項目		評価(平均)
準備	企画や内容	4.50
	教材の準備	4.83
接し方	指導者の声の大きさ	4.33
	児童生徒への接し方	4.67
配慮と成果	自ら考える場面設定	4.00
	所要時間	4.00
	安全管理	4.00
	目的の達成度	3.83

評価値：5 とても良好 ←→ 1 とても不良

表 8 教師からの意見・希望(22件 複数回答)

指摘項目	頻度	
プログラムのあり方	プログラムの多様化	5
	教材準備の良好さ	4
	児童の興味関心の高さ	2
	児童自らが考える場面の設定	1
	個人差に応じた指導	1
運営	申し込み窓口の一本化	4
	事前情報の提供	1
	人手不足	1
その他	施設整備	4
	謝辞・再来	4

なった。また、教師からの意見は、類似性のあるものをまとめて類型化してとりまとめた(表 8)。教師からの意見希望は全部で22件寄せられたが、これらは、「プログラムのあり方」「プログラムの運営に関する事柄」「その他の事柄」に大別できた。このうち、プログラムのあり方については、プログラムの多様化を求める意見や教材準備が非常に良好であった点に関する事柄が多い状況であった。また、プログラムの運営に関する意見としては、申し込み窓口の一本化を求める意見が最も多い結果となった。これはプログラムの実施依頼・施設の使用申し込み・宿泊施設の利用等について、利用申し込みの際に対応してくれた担当者にスケジュールを相談することにより、関連する施設利用に関する手続き等が進められるよう望んでいる内容で、いわば、申し込みのための事務手続きの簡略化を求める意見である。

6 考察

1) 教材研究とその他の準備に費やした作業量と作業の内容

今年度実施したプログラムの多くは比較的少人数を対象とした内容であったが、9種類の活動のために、合計で72日・人の作業量を要し、実施には教材研究を中心に多くの準備作業が必要であったことがわかった。また、担当者は日常においてフィールド内の動植物や事象等の把握に努めており(写真 4)、ここに示した教材研究を進める際には、こうした日常の取り組みにより得られた、担当者各人のフィールドの状況や森林の素材の所在等の予備知識がかなり大きく役立った。即ち、



写真 4 指導者の日常からの取り組みの例(植生の確認と生態の調査)

日常からのこうした取り組みなしに、これらの準備を進める場合には、さらに多くの時間を費やさなければならない状況が予測される。

学校教育による学習目的での施設利用が増加し、プログラム提供の頻度、規模の拡大や要望の多様化が振興した場合、今年度の状況を標準とすると、準備に要する作業量は大幅に増加することが予想される。また、野外をフィールドとする場合には、実施の時期により森林の素材の状態が刻々と変化し、活動時間や人数などによっても利用できるフィールド・教材が変化する。従って、定型化・マニュアル化により教材研究の作業軽減を図ることが可能な部分(以後利用可能な基本資料・サンプル等 表 4)のほかに、活動目的やその達成手法、季節・フィールド、指導者に必要となる技術等を背景にプログラムを更新しなければならない。このため、準備作業の質(専門性)や量、指導可能な児童生徒数から見て、学校教育を受け入れて森林教育活動を展開するためには、1～2名の専門員の配置(フィールドへの常駐が理想)、学年単位の活動に対応できる3～4名の講師(専門員込み)の確保が最低限求められる。

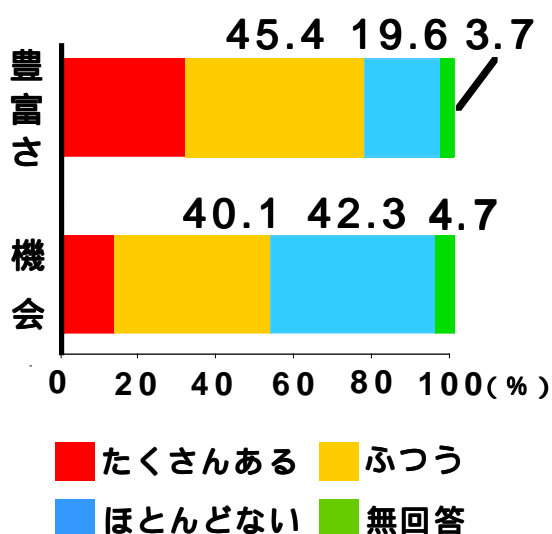
2) 児童生徒・教師からの評価

ここでは、児童生徒・教師からの評価結果から次年度以降のプログラムのあり方を考察する。

児童生徒による評価は概ね良好であり、特にその理由にあったように「目的が明確で達成可能であること」「多様な森林の素材に触れることができたこと」「普段の生活では体験できない内容であったこと」があると考えられる。図 2は、児童生徒に学校周辺の自然の豊かさとそこに出かける機会の多さ、普段している遊びについてたずねた結果である。

学校周辺の自然の豊かさとしてそこへ出かける機会の多さについての質問に対しては、学校周辺に自然が「たくさんある」という回答は全体の31.3%となり、「ほとんどない」とする回答(19.6%)を上回った。

学校の自然は豊富？ 自然へ出かける機会は？



どんな遊びをしていますか？

有効回答 414 回答数 443 (58種)

回 答	頻 度	比 率
テレビゲーム	81	18.3
おにごっこ類	58	13.1
サッカー	43	9.7
ドッチボール	40	9.0
カード	25	5.6
本を読む	23	5.2
森で遊ぶ	10	2.3

図 2 児童生徒の自然体験 (N=511)

しかし、その自然の中へ出かける機会の多さについての質問に対しては、「たくさんある」とした回答は全体の12.9%に対して、「ほとんどない」とする回答が全体の42.3%となり、周辺自然への認識は比較的高いがそこへ入っていく経験が少ない結果であった。また、ふだんの遊びに関する質問については、テレビゲーム・カードゲーム等のゲーム類やサッカー、ドッジボール等の体を動かす遊びが上位を占め、生き物に触れたり、観察したり、捕まえたりする遊び（森で遊ぶ等）は下位に止まっていた。

これらの結果と児童生徒からの評価を合わせて考えると、大多数の児童生徒の普段の生活における自然体験は少ない状況にあり、それだけ、今回のように森林を訪れる機会は貴重である。また、このような経験ができる機会は、今回のような学校教育での活動に限られる可能性が高く、学校利用を受け入れての森林や自然体験の提供には、それだけ、十分な配慮が必要になる。特に、先に示した「目的の明確性と達成性」「取り上げる素材の多様性」「内容の非日常性」等はプログラムの作成の方向性として重要であると考えることができる。

また、教師からの回答においても、指導のための教材準備の良好さや児童生徒への接し方が高く評価され、今年度の取り組みは概ね良好な評価を得たと考えることができる。しかし、同時に教師からは「プログラムの多様化」「窓口の一本化」について要望が多く出されており、さらに、次年度からの展開を考えると、教師からの意見・要望にもあった「事前情報の提供」についても改善策の検討が必要になると考えられる。そこで、ここではこれら3点について考察する。

最初に、プログラムの多様化についてであるが、その方向性を考える上で参考となるのが、2002年度より完全実施される「総合的な学習の時間」である。図3は教師に対して総合的な学習の時間の取り組み予定をたずねた結果である。学習指導要領には、総合的な学習の時間の取り組み事例として「環境」「情報」「福祉」等が挙げられており、これらを選択肢としたところ、最も多かったのは「地域学習」(75.0%)で、その他の自由記載を見ても、「地域をベースに人間の生き方に関わる内容」「地域を素材に、内容を発展」等、地域性を重視した内容を考えている回答が多い結果となった。

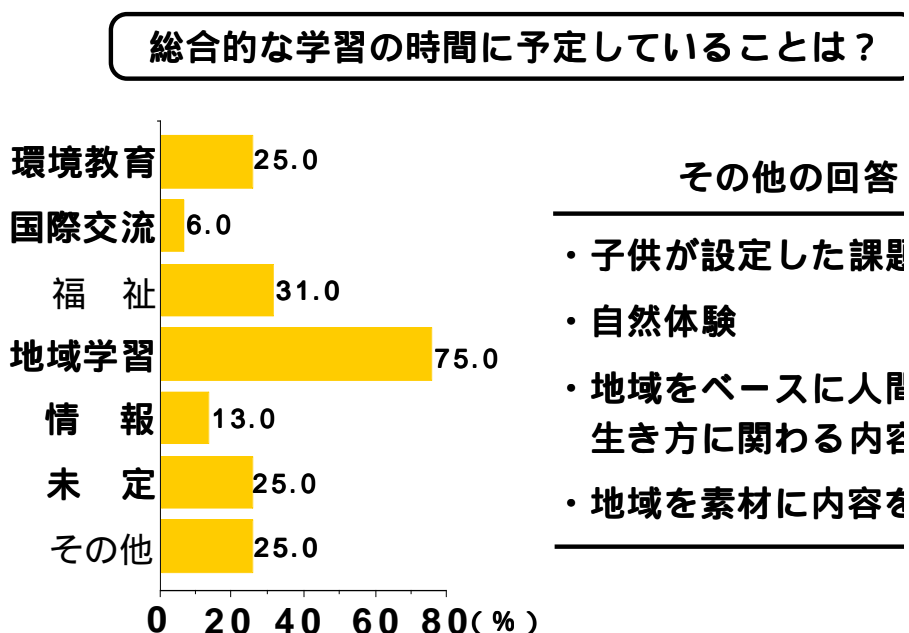


図 3 総合的な学習の時間への取り組み予定 (教師: N=16)

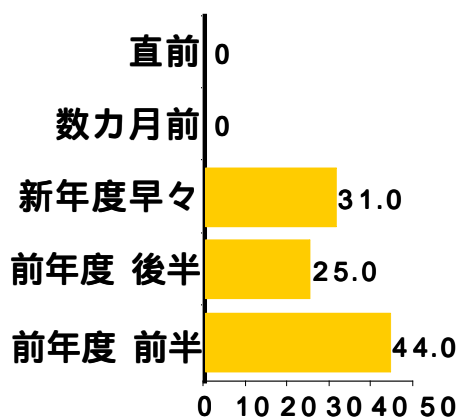
総合的な学習の時間における「地域性の重視」という観点から考えると、道民の森は現地近郊の学校からは直接的な学習の場として、遠隔地の学校からは、各地域で学んだことの発展や比較応用の場として位置づけることができ、プログラムにおいても地域性を重視した内藤づくりが強く求められることになる。また、総合的な学習の時間は、学校裁量の増大や児童生徒の問題意識を重視した授業展開が成されることから、学校側の要望のさらなる多様化が予想される。従って、次年度からのプログラム提供では、次の点を踏まえ、プログラムの多様化に取り組む必要があると考える。

- (1) 学校教育の実態・要望等の情報収集を綿密に行うこと
- (2) 教師との情報交換により児童生徒の問題意識を汲み上げ、十分に教材研究を進めること
- (3) 森林・林業との関連を重視したプログラムの企画立案を進めること
- (4) 「目的の明確性と達成性」「取り上げる素材の多様性」「内容の非日常性」に配慮を行うこと

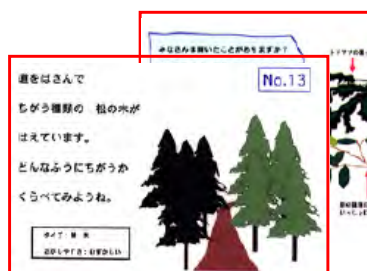
上記4点の達成には、依頼された学校教育サイドとの十分な情報交換が必要であり、それだけ積極的な対応姿勢が担当者に求められることになる。また、地域性の重視という観点から、指導者・スタッフに、道民の森に関する知識・経験の蓄積が求められることになる。

次に、事前情報の提供についてであるが、これについては教師を対象にアンケート調査を実施している。結果を図4に示す。質問は「学校行事で支障なくプログラムのご利用を頂くには、プログラムに関する情報をいつ頃からお知らせすればよろしいでしょうか。」というものであった。これに対する回答を見ると、「訪れる直前」「訪れる数カ月前」を選択した教師は0%であり、「新年度早々」(31.0%)、「訪れる時期の前年度後半」(25.0%)、「訪れる時期の前年度前半」(44.0%)と、相当に早い時期からの情報提供を求める意見が多かった。

プログラムの情報提供に適切な時期はいつですか？



活動の進め方



提示する教材・資料

図 4 プログラムに関する情報提供の適期

学校教育では、次年度の年間カリキュラムの決定を第2学期から3学期の間に行う場合が多い。道民の森でのプログラムの提供には、学校教育サイドの立場から見ると新規に参入する体験活動の場である。従って、これらに関する情報を早い段階から継続して提供することにより、年間カリキュラム決定の際に有用な情報として扱ってもらえることになる。また、情報の内容については、プログラムの進め方や用いる教材等が具体的に示されたものが求められる。これは、年間カリキュラムの決定の段階ばかりでなく、プログラム利用が決定した後の児童生徒への事前指導や児童生徒による参加プログラムの選択の際にも重要である。先に示した児童生徒の評価の中で、「虫が嫌い」といった指摘事項があったが、活動の内容や教材に関する具体的な内容が事前指導等で児童生徒に伝われば、嗜好性の低い活動に無理に参加して時間を無駄にすることを回避し、興味のある活動に意欲的に取り組ませることが可能になる。情報提供は単に利用促進という観点だけでなく、末端にいる児童生徒の有意義な体験活動の保証のためにも重要である。

最後に、窓口の一本化について考察する。図5は、平成12年度に神居尻地区を訪れた学校の滞在中のスケジュールを再現したものである。

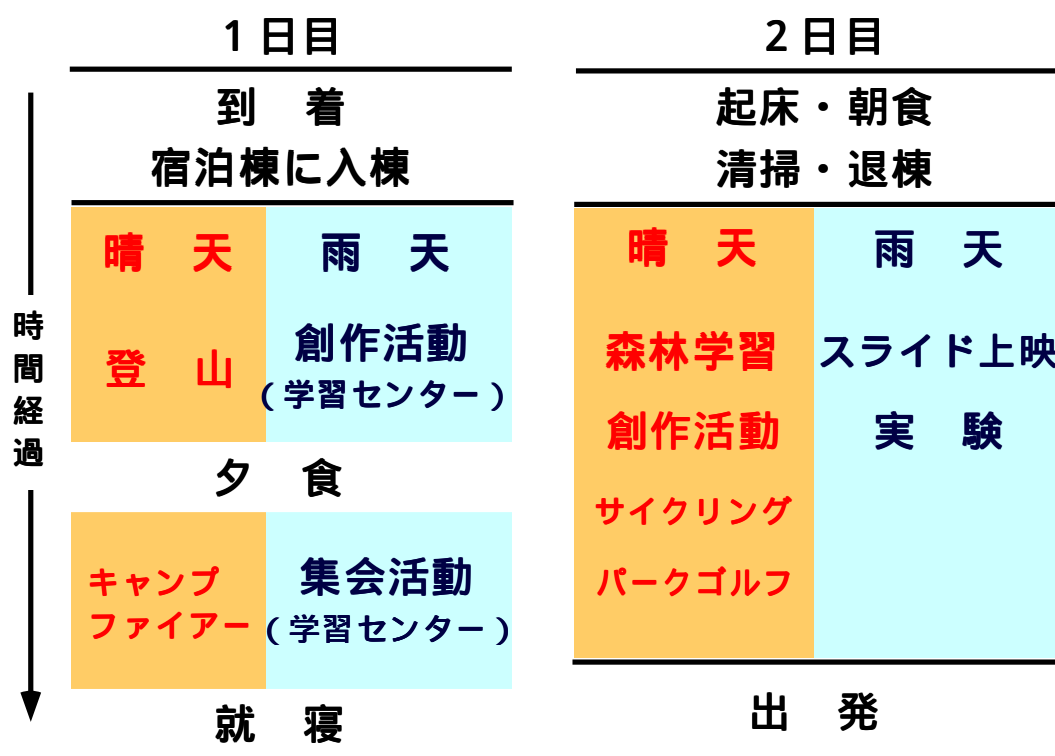


図 5 学校教育の活動日程の例

スケジュールは、宿泊施設、森林学習センターを初め、登山や青山ダム地区のパークゴルフ場の利用等、多様な施設・場所を対象に実施されていることが理解できる。また、晴天時だけではなく雨天時の利用日程についても計画がされており、初日・二日目の天候により野外と室内を組み合わせるスケジュールである。また、この間、教師は多数の児童生徒の引率・指導に当たらなければならないだけでなく、限られた時間の中で、児童生徒に森林を体験させる活動を進めていかなければならない立場にある。現状の道民の森では、宿泊施設、森林学習センター、プログラム利用等の申込みは別々に対応するシステム

であるが、類似した事務手続きを重複して行わなければならない状況は引率当事者にとって大きな負担となる。今年度は試験提供であったが、今後は、内容の優れたプログラムづくりと共に学校教育が利用しやすい運営体制を作ることに取り組む必要がある。

7 おわりに

森林学習センター周辺の森林を活用した学校教育を対象としたプログラムの作成を進め、それにより、学校教育から好評価を得ることができた。また、課題として、人員体制のあり方やプログラムの多様化、事前の情報提供のあり方や運営体制づくりについて検討の必要性が高いことがわかった。今年度の試験実施で得られたこれらの点について検討しながら、より効果的で楽しいプログラムの提供を進めていくことが必要となる。

林業試験場は昨年度からの取り組みで、森林学習センターでの創作活動と周辺森林を活用したプログラムづくりに取り組んだ。これからは、先の総合的な学習の時間における「地域性の重視」という項目にもあったように、道内各地域の森林教育に取り組む施設・機関の役割が重要になる。今回の取り組みで得られた成果を基に、各地域での森林教育活動の支援に取り組み、研究成果の普及に努めたいと考えている。